



K・チエズニー著・植松靖夫、中坪千夏子訳 『ヴィクトリア朝の下層社会』 高科書店(一九九一年四月)

著者	小倉 襄二
雑誌名	評論・社会科学
号	44
ページ	99-106
発行年	1992-09-30
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002071

K・チエズビー著 植松靖夫 中坪千夏子訳

『ヴィクトリア朝の下層社会』 高科書店（一九九二年四月）

小 倉 襄 二

I

阿部謹也氏の著作の『社会史とは何か』（筑摩書房・一九八九年・九月刊）は含蓄深く、思考を触発する好著である。「歴史研究」というものは、自分の外に起ってきた出来事を観察し、分析し、叙述するものだと考えている人がいるようである。そのような考え方もありうるであろう。しかし私たちは歴史研究をそのようなものとは考えていないのである。私たちにとって社会史研究とは自分の奥底に深くわけ入ってゆく試みであり、たゞ外をみることではない。外的事象と対応するものを自分のなかに発見できないでどうして外的事象を理解することができるだろうか」という記述がある。阿部謹也氏はヨーロッパ中世史研究の碩学でありとくに賤民史についての幅広い研究、独自の視角から賤視・賤民

の社会史を構築、私たちも多くの教示をうけている。阿部謹也氏の著作では恒に人間と人間の関係とか絆、モノー目にみえる一を

『ヴィクトリア朝の下層社会』

媒介とするもの、目にもえない絆によって媒介された関係という表現がでてくる。氏の研究方法のキイ・ワードともいえるものである。この探究は至難であり社会史として人間と人間の関係を解いた著作に接することは稀である。

『ヴィクトリア朝の下層社会』（Kellow Chesney, *The Victorian Underworld: Maurice Temple Smith, 1970*）はこの阿部謹也氏のいう社会史研究の成果としての意味をもっている。私自身の「下層社会」についての〈現代の貧困〉へと辿るうえで、外的事象と対応する自分のうちなる触発にかかわる著作として読むことができた。

本書は全篇が十章に区分されている。はじめにヴィクトリア朝をその中期、主として一八五〇年代をはさむ前後二〇年間の状況を要括している。以下、下層社会（underworld）、それを構成する放浪者、下層社会の要塞（スラム、貧民窟）の全体・こそ泥と追っ手、泥棒、泥棒紳士・押込み強盗と故買屋・乞食・べてん師・詐欺

『ヴィクトリア朝の下層社会』

師・賈金つかい・賭博師・売春・それぞれに当時の新聞、雑誌、手紙、自伝、小説、議会報告書、監察調査などを詳細に分析し、その脈絡、相関を著者K・チエズニーはゆたかな想像力をも交えてあざやかに描出している。

福祉国家の形成やソーシアル・サービスの展開、社会政策史研究にとって英国のヴィクトリア朝の理解は不可欠といわれてきた。労働経済論、社会問題史としても多くの探求と成果が存在している。ただ、なぜ、ヴィクトリア朝なのかについて、著者は、私たちにはよくわからないアプローチについて語っている。それはへだたりがありながらの『同時代』を生きている実感、イメージに彩られていることが本書の方法である。絆というコトバがここではまる視野である。それを著者は一つの魅力として、妙に気のおけない親しみやすさと表現している。このあたりは、私自身のロンドン・ライフの経験からも、ヴィクトリア朝が二重映しにみられている街区のたたずまい、今に至る壮麗と悲惨の対照として実感されるものでもある。

この下層社会は、ヴィクトリア朝の英国で社会に柔軟性が出てきて、冒険心に富んだ者にとって社会の様々な障害が乗り越えやすくなってきたとしても、それで平等主義の世の中になったとは到底いえないという現実に関連している。工業化によりいろいろなところで貧富の差が大きくなって、デイズレリーの言う分離した「二つの国民」ができあがったこと、この下層社会は「下層民」(the great unwashed)を創り出していった。十九世紀中期

という状況のなかで一八四〇年、イングランドおよびウェルズの二六〇〇万人の住民のうち七分の六が救貧法の実施地域に住んでいた。一八三四年の新救貧法についても著者は、『名高いヴィクトリア朝精神を示す不可欠の証拠』が数多くの人々の人生に暗い影を投じたことを指摘している。〈新救貧法〉は人々に恐怖を抱かせるべく目論まれた苛酷な法律であり、たとえ呑気さ、温情主義、臆病さ、キリスト教的慈悲、その他の数多くの理由や原因からその苛酷さが軽減されたとしても、法律の条項は、それを実施する側に当たっている者が残虐で卑劣であれば曲解され、苛酷さはさらに増大し情容赦のない残忍な行為を生む処となっていた。著者は、新救貧法の施行、とくに院外救助、救貧院、労役場などの具体的な悲惨の描出、救貧院での試練、効果についての紹介もあり、新救貧法施行上の状況資料としても興味ぶかい。

たとえば、id-doo-reliefとしての救貧院では夫婦は別々にされ、子供からも離される。偶然に大食堂の近くのテーブルで食事をすることになっても、お互いに口をきくことは禁じられていた。母親のもとから離せないほどの小さな子供を含めて全員が無言で粗末な食事、オートミルのかゆか薄いスープ、それに乾いたパンかじゃがいもを主に食べる。一たび救貧院に入ると外界からの隔離、家具その他何もない。場合によっては凍てつくような大部屋の中に、精神薄弱者、肺病、梅毒、身重の女性、飢えてやって来た人品卑しらぬ人たちが誰かれの見境なく收容される。問題になるのは性別と年齢だけだ。男性の場合石砕き、槓肌作り(船

体や水槽などの水漏れを防ぐために詰め物となる繻状の材料をヒノキなどで作るのだが単調で辛い労働)、手回し臼で骨をすり潰す作業があてがわれた。作業が処罰として課せられることもあり、減食、小部屋への監禁、懺悔服を着用させられるなどの日常があったと描写している。さらに、軽い刑の矯正院、長期刑の刑務所についてもその処遇・囚人労働についての情景描写も付加されている。著者は下層社会についてヴィクトリア朝の「光と影」この導入について救貧法、矯正院、監獄に行政施策の在り方から始めての時代の関心をさぐりあてているといえよう。この関心にみちびかれた、公私のぼう大な調査や報告書、デイケンズの『オリバー・ツイスト』さらに、ヘンリー・メイヒューによる『ロンドンの労働とロンドンの貧民』など、本書には数多く引用されている資料などがヴィクトリア朝の「少数の特権と発言力をもった人々」の下層社会への関心にむずびついた経緯をも指摘する。それは、一面において、不幸な者を思いやる道徳的な気持をはるかに超えたもの——錯綜した貧民街の描写が気取りばかり増してタブーでがんじがらめになっていたヴィクトリア朝の上層や中産階級を如何に惹きつけたかは理解するに難くないという事実でもあった。

II

著者の立場は、はじめから下層社会について截然とした区画、定義を下すところにはない。この「UNDER WORLD」には、

『ヴィクトリア朝の下層社会』

明確な境界線などは存在せず、この周辺領域は、どこを見てもぼやけている。当時、このぼくぜんたる社会については、少数の特権者や中産階級からは「危険な階級」(dangerous classes)と呼ばれたという。そして、それは増加しつつあった労働者全体や産業労働者のことでもなく、労働者のなかの政治意識の強い過激な少数派の意味でもなかった。それは、「生き方そのものが、当時の秩序ある社会、およびその社会を支えている法律、道徳、タブーへの挑戦となっているある種の階層の人々」をしめすコトバであったという。これは本書の論述にとって基本ともいえるべき箇所であって以下で本書がとりあげる多彩多岐にわたる下層社会の構成員はこの「危険な階級」の状況を集中的に体現する人々に外ならなかったといえよう。

下層社会の形成とヴィクトリア朝の鉄道によるあつという間の交通体系の拡大、土方、その移動、飯場の展開、粗糞、野放図なくらしのいとなみ、その治安上のトラブルなど、当局者との反目、ついで、ロンドンの呼売商人(コスター・マンガ)、ヴィクトリア朝の生産、輸送の発達のために都市労働者に急速に多量の食料品などの供給がもとめられ、呼売商人——行商人としてこの需要をみたすことになった。これは不安定で家族ぐるみで一日頑張っても半ソヴリン分のニシンの小魚が売れるかどうか、手押車をもっている者は決して立ちどまってはならず、その取締規制は、おそらく不合理で犯せば、巡回中の警官はただちに介入、迫害した。幼いときから呼売商人となり、天気のみまぐれに左右され、

『ヴィクトリア朝の下層社会』

貯えもなく、警官の悪意にみちた行動のため、追いたてられ、絶望的な心もとないくらしに陥ちこんだ。この時期マイヒューの記録によればロンドンにはこのような呼売商人が約一万五〇〇〇人いたという。つづいて、さらに危険な人々とみられた煙突掃除人、小僧とよばれ少年期から苛酷な就労で、事故、呼吸器、性器の癌などの職業病に侵された。

一八四〇年からは煙突掃除の少年から年季奉公の契約証文を取ることが法律で禁止、そのため親方は、しばしば誰も保護しがらない小さな男の子を集めなければならなかった。少年を仕事になじませるのは必ずしも容易ではなく、時には怯えている子供の足の裏を下から突いたり、火をつけたりして狭苦しい煙突を昇らせました。家庭の煙突は次第に細くなり、工場の高い煙突がどんどん増えていったので、少年に掃除をさせる方法はますます苛烈になったにちがいないという有様であった。

ここでは不正と残忍な行為が容認され、職業柄、強盗や家宅侵入の犯罪にもかかわらず、とくに下層社会のメンバーとして危険視された。

次いで、社会の変動の底辺で多数の放浪者たちの存在したと、季節労働、物乞い、たかり、救貧法による臨時救済施設、アイリッシュの浮浪化、大道芸人、異邦人としてのドイツ、イタリヤの旅芸人、ジプシー、サーカス団の人々。とくにヴィクトリア朝を彩るイヴェント、フェアでの興行の活気、あるいは、密猟者たち。著者による英国の放浪者たちの詳細な描写はヴィクトリア朝

の人間の絆、底辺において、どのようなくらしのいとみなとそれがある種の解放——暗く輝くような自由奔放なるものへの渴望とむすびついていた状況を巧みに語っている。

『下層社会の要塞』とはヴィクトリア朝の貧民窟のことであり、拡大しつづける工場都市の共通したパターンとして定着したもの、いろいろのパターンがあり、不潔、惨苦、犯罪の『要塞』となった、産業の集中化の圧力であり、そこは、『裏の共同社会』を形成し、この地域を横切るみすばらしい路地裏の中庭と道路の網状組織（ネットワーク）、迷路（カスバ）の密集であり、そこには、互いに頼りあうしかないこと知っている。どうしようもない層のような人間がひしめきあうことになった。

拡大し続ける工業都市では、共通した一つのパターンがすでに相当以前から定着していた。裕福な人々は彼らの富を築いてくれた土地から、新興の土地である新しい郊外へと移り去っていた。次第に住み心地は悪くなって行ったものの、住宅地帯はどんどん拡がって行き、ついには工業化されていない古い町の中心部にまで及んだ。繁華で汚い町を中心としてその周辺に不定形に拡がる地域の、工場や倉庫の煙突や起重機（ギョウキ）のそばや、汚水と工業廃棄物で濁った悪臭を放つ水路の付近には、かつては市場町の端に建てていたのに今や網の目のように拡がる路地の中に吞みこまれてしまつて朽ち果てた家々が見られたことだろう。古くからある大都市では、このような発展のパターンがすっかり崩れて、もはやこの居住の形態が容易には見えなくなっている所も多い。だが大量

の労働者が、経済の流れによって既存の中心部のまわりへと押しやられた所ではどこでも、内側へ内側へと人が入り込んでその地域がすし詰め状態になるのはまず避けられなかった。実際問題として、土地の所有者が自分の土地をどうしようとする規制は殆どなく、すでに老朽化してはいてもまだかなりの収益をあげられる建物にとり囲まれた土地なら当然の成り行きとして、まだ残っている空き地にはむりやり新しい住居を建て、古い建物にはもつと人を詰めこむことになったのである。家の周囲の庭や整備された庭園は建物でつぶされ、小道や木材集積場には群居地が設定され、窓のない丸木小屋が造られた。特にもし地下室と屋根裏部屋のある手頃な大きさの古い家があれば、たちまち人間の巢と隠れ場の迷宮が出現し、そこには最も無法で評判の悪い者たちが群がってスラムの混沌を加速した。

これがヴィクトリア朝の貧民窟の形成とその原型であった。産業の集中化の圧力を受け、一つの地区を核にして新たな建物が次々に建てられた結果、恥ずべき危険な過密地域が誕生したのである。地域による情況の相違から、実に様々な種類の貧民街ができたのだが、その中では大体において似た様な生活が営まれた。

これらがK・チェズニーによる下層社会の『要塞』としてのスラム形成の推移の要約である。

下宿屋、不当な部屋代の収奪、木賃宿（ネガースケン）、日雇、呼売商人、乞食、泥棒、売春婦、道路清掃人、盗品の売買、大道芸人、多くの職なし、幼い子ども、非行少年たち、とくに国の内

『ヴィクトリア朝の下層社会』

外、異邦人の犯罪者もロンドンのスラムに潜入、ロンドン警察はこの下層社会への困難な取締りを継続する外なかった。

著者のこの項の記述は、当時のスラムの情景を警察資料、ベスナル・グリーンを調査した資料などによって詳細に描写しており、ヴィクトリア朝の臨場感とリアリティに溢れるスラム記録のエッセンスの収録という感じがある。

さらに五章以下に、危険な人々としての犯罪者たち、追い剥ぎ、泥棒、押込強盗、故買屋の類い、さまざまなペテン師・詐欺師・賈金（カウ）つかい・賭博師などの生態についてのくわしい紹介がある。こうした部類の下層社会のメンバーについては、従来は、周縁的なものであって、『下層社会論』の視野には入っていなかった未知の領域である。読了後、あらためてヴィクトリア朝の下層社会を構成する人々の位相の多様性、その生き方のきわだった特性と『要塞』共同のネットワークを基盤とする共通の『絆』を本書によって知ることができる。

III

下層社会の様々な術策や職業の中で唯一、売春だけは明確な社会機能をもっていた——いろいろな形はあるにせよ（悪徳）もまた重要な一要素であり、昼間の上品で立派な世界を与えるのに必要な暗闇であることを理解せずにヴィクトリア朝の文明を見ることのできない。このケロウ・チェズニーの結びのことは、下層社会抜きでこの時代の英国社会を考えることはできない以上、下

『ヴィクトリア朝の下層社会』

層社会がヴィクトリア朝では一つの重大な機能を担っていたと言えるだろう。それは、過激な競争社会から出て来る層のような人間が流されて行く社会の汚水溜め、なくてはならない汚水溜めの到るところに下層社会は根を這っていた。また下層社会から一般社会への止むことのない逆襲——本書がとりあげてきた、盗み、物乞い、詐欺行為などが社会に強い影響を及ぼした。"社会の"負け犬"を人目につく脅威のない迷惑な存在とすることによって、何も言わずに苦しんでいる者の運命など見逃しがちな一般の人々の目に、否応なく写らせたのである" という指摘もひろく下層社会研究への論点への重大な提言といえよう。さらに、下層社会が独立した社会であり、一般社会と隔絶していると考えるのは誤りで、至る処で国の社会、経済発展に依存している姿があり、下層社会を発展しつつある社会の重要な一部分と視ることが現実的という指摘をしたことも当然といえよう。

とくにヴィクトリア朝の底辺に蠢く児童問題の把握は重要である。"屑のような人間が大勢集まるこういう安宿の最もひどい特徴は、そこにあらゆる年代の子供たちがいっぱいいたということであろう。実際、他のスラム街でもそうだったが、宿が不潔になる原因は主に、階段や通路のあちこちで用を足していた、大勢のほったらかしにされた幼児たちにあったのである。もちろんその多くは成人の下宿人の子供であったが、中にはその居住者である乞食や泥棒の親方が訓練して自分たちの手先にするために置かれていた子供もいた。けれどもまだ幼いうちから独立するのは下層

社会の特徴であり、十一歳程度かそれ以下の多くの子供の下宿人たちが独力で生計を立てていた。数多くの迷える腕白小僧が救貧院や矯正院の脅威から身をかまし、官憲当局を避けながら街頭で懸命に生きていた。また当局は当局で財政への余分な負担となる子供たちから目をそむけようとするが多かった。このような子供たちの多くの場合下宿屋に避難した。子供たちは一つの寝場所に四、五人詰めこまれる代わりに割引料金で泊めてもらうことがあったし、盗んだ食物を持ちこんでは安く売ったりしたので役にも立った。このような安宿くらい、子供たちが墮落させられたり、犯罪生活のための完全な基礎知識を受けられる場所はほかになかったであろう。子供の泥棒団を組織し、さらには炊事場で掏摸教室まで開く下宿屋の主人も中にはいた。だがこれらの子供たちは乱暴な扱いを受けたかもしれないが、束縛されることは普通はなかった。幼い非行者たちは、自分たちの利益になりそうな場合には保護してもらいながら次から次へと別の宿へ移り住んで行き、知り抜いているスラム街の迷宮へと——あるいは警察の手中へと——消えていった。"

宿によってはある程度のプライバシーを守ることが可能だった。カッブルが一週半クラウンで、また子供が一宿なら三シンリング六ペンスで一部屋と一つのベッドを確保することができたという話もある。また男性だけを泊める宿もあった。しかし一般的には乱交がくり拡げられていたらしい。何組かのカッブルが同じ部屋に眠り、夜のパートナーを変えては楽しみに変化をつけるとい

うことがよくあったようである。暑い季節には服や寝具についている寄生虫やら息詰まるような空気のために、下宿人たちは男も女も全裸でベッドの上に横たわっていた。裸に対する当時の考え方——それは階級を問わず誰にでも共通する考え方だった——を思えば、どれほどまで彼らがあらゆる道徳的規範を放棄していたかよく分かるであろうと記述している。

『売春ぐらい下層社会と体面を重んずる社会とを強固に繋いでいるものはなかった』と著者はいう。現在の規律で考えると、ヴィクトリア時代に売春が重要な役割を担っていたのは異様に見える。ただし、『性の抑圧』の代名詞とも言うべきヴィクトリア時代の社会に、大勢の売春婦がいたということが問題なのではない。瞠目すべきことは、ロンドンの上流社会の中心地においてさえ、売春婦が堂々と商売をしていたということなのである。

『悪徳のはびこる華美な大都会』の特異な性格は、夜だけでなく昼間にも歴然と現われている。正午、付近の街並が忙しく生活と仕事に追われている時、ハイマーケットでは歩道を通る者も減多になく、鑑戸も多くは閉じられたままで、眠そうな、世間から隔絶した、殆ど安息日さながらの雰囲気が漂っている。そんな中でガタガタと音をたてて往来する乗合馬車だけが、わずかに週日らしい活気を添えていると言えなくもなかった。レスター・スクエアは、ホテル客や買物客がいるにも拘らず、まだ半ば眠っている状態だった。換気のために開け放った戸や窓からは、モップをもった女やワイシャツ姿で欠伸をしている男が掃除をしている姿

『ヴィクトリア朝の下層社会』

が見える。まともな家屋敷では朝食の何時間も前に掃除などすんでいるのに、午後になると、近隣のアーケードや商品街などを歩き回る女性の姿が次第に増え始めるが、この街並が本当に活気づくのは、劇場の入口に明かりが点り始めてからであった。厚化粧をした女たちが大勢現われ、街路に並び、路地の角で客を待った。高級売春婦ともなればいつも決まった場所へと出かけて行き、まだ幼い売春婦は客の袖を引っぱりながら蔭に隠れるような素振と見せた。薄暗い横丁に面した戸が開けられるとどっと光があふれだし、音楽が途切れに聞えてくる。至る所できちんとした身なりの男女が次々と一頭四輪箱馬車や一頭立二輪馬車から降り立った。これは、性の文明史のなかでヴィクトリア朝の占める奇妙な位相にかかわるだろう。性の抑圧の代名詞とも言うべきヴィクトリア時代の社会に、このように大勢の売春婦がいたということが問題なのではなくて、とくに注目すべきはこの描写のようにロンドンの上流社会の公然とした状況下に、売春婦が堂々と営業をしていたということなのだ。この繋りの事実として、ここでは種々の人身売買、男娼の存在など売春の形態、モラル、都市化、性の階級性、抑圧への反動、息苦しくなる仕事をして惨めな貧困を味くらうなら売春の方がまだましだとしても、その末路の多くは悲惨でもあった。競走は熾烈、娼婦になったがでることならすぐにも別の生活をと望む女性が多かった。それに低賃金重労働を強いられる出来高払いの労働者と大差のない収入しか得られない事態など売春は相当に墮落しない限りありえないことだった

『ヴィクトリア朝の下層社会』

としても説明されている。売春のメカニズム、そのヴィクトリア朝の偽善的なセクスライフの需給の不均衡もこの事態に深くかわるものである。著者は、売春を本書の終章においているが、これは、ヴィクトリア朝の下層社会の意味を辿るうえで、このキイ・ポイントと位置づけて要括したといえなくもない。

いま、世紀末である。本書の扱った時期のすぐあとにシャロック・ホームズの世紀末がある。私事にわたるが一昨年、JSHC(ジャパン・シャーロック・ホームズ・クラブ)に入会した。ホームズやワトソンの働いたヴィクトリア朝の世紀末の英国の風土、社会誌として読んでもきわめて興味ぶかい。そして、切裂きジャック(Jack the Ripper)の舞台はK・チェズニーがくわしく描出した下層社会の要塞、ロンドンのホワイトチャペル地区でもあった。ヴィクトリア朝の「暗黒」、光の部分に相応する部位の認識の集大成ともいふべきものが本書に在る。訳者のあとがきにもあるようにとくに未公開の新しい資料を掘りおこしているわけではないが、実に多種目の文献、資料によって、それを見事にまとめあげている。下層社会をとりあげて、ここまで充実した内容の書物は、すくなくとも一巻本としては、本書が最初であろうと高く評価している。訳文も達意であり、文中に、ギェスタヴ、ドレなどによる挿絵、当時のロンドン市街図、索引などが周到にくみこまれていてやや煩雑な内容を理解するうえでの配慮のある好著である。

本書に関連する文献として角山崇・川北稔編『路地裏の大英帝

国』(平凡社、一九八二年) L・C・B・シーマン『ヴィクトリア時代のロンドン』(社本時子ほか訳・創元社、一九八七年)長島伸一『世紀末までの大英帝国―近代イギリス社会生活史素描―』(法政大学出版局一九八七年) A・ギャンプル『イギリス衰退100年史』(都築忠七ほか訳・みすず書房、一九八七年) H・R・F・キートン『シャロックホームズ・世紀末とその生涯』(小林司ほか訳・東京図書、一九八八年) R・D・オールティック『ヴィクトリア朝の緋色の研究』(村田靖子訳・図書刊行会、一九八八年) C・ヴァイニー『シャロック・ホームズの見たロンドン』(田中喜芳訳・JICC出版会、一九九〇年) G・クロシック『イギリス下層中産階級の社会史』(鳥浩二ほか訳・法律文化社、一九九〇年)などが私の関心からいうと参考になる。さらに労働者階級の状態史としては原剛著『19世紀末英国における労働者階級の生活状態』(勁草書房、一九八八年)が重要な著作である。

1992・4